

父母によばれて假に客にきて

心のこさず歸るふるさと

とある。在家すら然り、況や出家をや。

又出家は利益名譽を求むる爲でもない。名利を求めんと欲して、世外の道人と爲るは木に縁て魚を求むるの類である。

烏丸光廣卿……江戸に召されて、三年在府……斯て歸り上らるべきよし聞えけるに、かねて座敷の前に藏ありしを留守せる雜掌云ふやう、公の久しく廣き所に居なれ給ひしに、歸り給はゞ、此藏目前うるさく覺しめされんと、毀ち取てけり、此藏は數十年諸家より贈られたる寶物を詰め置れたるなり、其實共を書院にならべ置、詳かに書記し、さて家中に分ち取るべしとて、悉く遣

はしけるが、己れは一種も取らざりける。斯て光廣卿歸京ありて、四五日過ぎぬれど不審あることなかりしかば、雜掌いふやう御庭の模様かはりは致さずやと、いかさま廣うなりたるやう也、又藏ありつるがいかゞ致したるぞとありければ、されば江戸にて廣々としたる所に御住居にてうつたふしく思召べくと存じ近頃取はらひ捨たるなりといふ。然らば中に有たる物は如何致したるやと、御家中の上下に分散し遣はし候といふ、それは誠によかりし、さて汝は何を得たるぞと問はれて、イヤ某は何も取不申といふに、不調法なることぞとて笑ひ給ひて、取合もせられざりしとかや

と、窓のすさみにあると三省録に見ゆ。心ある人は斯く利欲に薄

し況や禪者をや。

出家は生死を明めん爲である。

生を明め死を明らむるは佛家一大事の因縁なり

と承陽大師は示された。

紀伊頼宣卿の御意には、人死を知るを達人とす、六十に餘りて萬事の謀をするは自分の身を知らざるものなり、身を知らずして人を知ること何ぞあらんや

とある、武夫の心とする所も生死を明むるにあるや知るべし。

煩惱を断じて佛の慧命を相續し、欲界色界無色界の三界を出で一切衆生を濟度せんとするは出家の目的たるや謂ふ迄もない。註に云く、

可謂衝天大丈夫。

佛云無常之火、燒諸世間。又云衆生苦火、四面俱焚。又云諸煩惱賊、常伺殺人。道人宜自警悟、如救頭燃。

心なき者は世の無常なるを聞ては安逸に日を送らんと欲するも心ある者は之を聞て大に警醒する。是を以て釋迦牟尼佛は遺教經の中に無常の火は諸の世間を燒くと示され、又法華經には衆生の苦火四面俱に焚くと教られ、長蘆慈覺禪師も衆生苦火四面俱焚豈可安然坐談無義と戒められ、又遺教經に諸の煩惱の賊常に伺て人を殺すと誨へられた。されば宜しく自ら警悟して頭燃を救ふ如く片時も怠つてはならぬ。伊菴權禪師の如きは

工夫甚だ鋭くして、晩に至れば必ず流涕していふ、今日又恁麼空

過不知來日工夫如何。

金の趣相耶律楚材の如きは萬松秀禪師に參じて

家務を屏斥し人跡を杜絶して日として參せざるは無く、寢を廢

し食を忘るゝ幾んど三年にして乃ち印證を獲たり

とある、これ吾人の模範とすべき所である。註に云く、

身有生老病死界有成住壞空心有生住異滅此無常苦火四面俱焚也

謹白參玄人光陰莫虛度

貪世浮名狂功勞形營求世利業火如薪

カアライルは世の名利に狂奔する英雄を罵つて

一疋の小狗が狂しく慄ひ恐れて馳け走つた。或惡戯者が其尾

に錫の鐘を結付けたのである。悶へ苦む犬はガラ／＼と音し

て町全體を馳せ通りて、頗る人目を引いた。是は妄想と知慮とを合併して運命が意地悪くも功名といふ錫の鐘を結付て驅り立てる彼の戰勝豪傑の恰好なる標本である。

といふてゐる世の浮名は全く空鐘の如く諠しき音響あるのみで少しも道味がない。かゝる虚榮の爲に狂て功を施し空しく形骸を勞して何かせん。また世利を營求するは道心を損するの本となる。龍牙和尚は

學道須且學貧學貧貧後道方親

といひ雲棲和尚は

蠶出桑抽葉 蜂饑樹結華 有人斯有祿 貧者不可嗟

草食勝空腹 茅屋過露居 人世解知足 煩惱一時除

といはれた。されば利養を貪つて悪業の火に更に薪を加へてはならぬ。註に云く、

貪世浮名者、有人詩云、鴻飛天末、迹留沙、人去黃泉、名在家。營求世利者、有人詩云、采得百花成、蜜後、不知辛苦爲誰甜。扛功勞形者、鑿水彫刻、不用之巧也。業火加薪者、麤弊色香致火之具也。

名利衲子、不如草衣野人。

衲子とは衲衣を被する者、即ち參禪の僧をいふ。名利に汚れたる僧は草衣の野人にも及ばぬ。殊に權門に近いて勢利を追求するが如きは祖門の大罪人である。

大河内金兵衛ある時、門外の路を下々に差圖し、造らせ居られける。砌托鉢の僧一人通りけるを、今日我齋なれば食をふるまひ申

べくとて、招き入れ寄附にて黒米のやうなる飯に、ざく／＼汁香の物ばかりにて、振舞申さる。僧思ふは、これ程の身上にて、似合さること、愚僧をなぶるにやと、不機嫌にて食を給畢て見えしとき、金兵衛心よく喰はれ、近頃喜ひ入る。左候は、御布施を進じ申べしとて、青ざし一貫文、取寄申されける故、僧見て飯は庵相にても、之を賜はらんこと大變なりと喜色面にあらはれける時に、繻をとき一錢ぬき、扇に載せて出されける。僧げてんして、早速にて取兼たるを、御坊必ず不足に思ひ給ふな。子細は一日が間、地を掘りても、錢一文出べからず、然るを手もよごさず、壹文取得ることなり。其上一貫文の中、一文たらずでは一貫文といはれずと道理を申されければ、僧も是非なく取戴きて歸りしなり。

と三省録に見ゆ、金兵衛が振舞は取て賞すべきにあらず、併し托鉢僧の心の中こそ愧かしく哀しげれ。食物の麤細によりて心を動かす布施の多少によりて喜憂を異にするは出家にあるまじきことと思はる。故に山堂震和尚曰く

若使飯梁嚼肥作貪名衲子不若草衣木食爲隱山之野人
とされば予が子女訓に云く

吾等三度の食事に向つては佛號を唱へ奉り合掌して頂戴すべし其味美なるにも喜ふべく其味美ならざるにも悦ぶべし皆佛の賜なれば好悪の念あらんは勿體なきことなりかし。

註に云く

唾金輪入雪山千世尊不易之軌則。末世羊質虎皮之輩不識廉耻

風隨勢陰媚取寵噫其慾也夫。

心染世利者阿附權門趨走風塵返取笑於俗人。此衲子以羊質也。此多行以慾也夫三字結之。此三字交出莊子

佛云何賊人假我衣服裨販如來造種々業

佛は楞嚴經に云何ぞ賊人我衣服を假り、袈裟をつけ、法服を着て、如來を販賣し人に裨與して利潤を得以て種々の惡業を造るを訶し給ふ。如來は梵に婆伽梵佛地論に

婆伽梵の聲は六義に依て轉ず、一に自在、二に熾盛、三に端嚴、四に名稱、五に吉祥、六に尊貴

とある、多く義を含む故に梵音の儘に存してある。裨販の二字は楞嚴の六句に裨附佛法貪販利養を釋してある。註に云く

末法比丘有多般名字或烏鼠僧或啞羊僧或秃居士或地獄滓或被袈裟賊。噫其所以以此。

裨販如來者撥因果排罪禍沸騰身口迭起愛憎可謂惑也。避僧避

俗曰烏鼠。舌不說法曰啞羊。僧形俗心曰秃居士。罪重不遷曰

地獄滓。賣佛營生曰被袈裟賊。以被袈裟賊證此多名。以此二

字結之。此二字文出老子。

於戲佛子一衣一食莫非農夫之血織女之苦道眼

未明如何消得。

嗚呼佛子たるもの一衣一食も世の農夫織女の信施にあらざるはない。若し修行未熟にして道眼明かならざれば虚受信施の大罪となる。消は用の義である。

眞宗の大徳香樹院或年本山差向によりて出羽へ下向ありし時、其地の僧侶本山調達金の御下を願へども返濟無を憤り御教示の席へ參集するものなし師は強ひて之を招き給ひ御自身の金子二百兩を出されての仰せに御本山におかせられても御逼迫の折柄なればこそ調達金の御依頼もありしなれ然るに其御返濟が滞ればこそ末寺の身を以て御本廟に恨を懷き剩へ御教示をも聽問致さぬとは以の外の誤なり猶又錙銖の利を争ふは在俗の事なり解脱憧相の袈裟を纏ふ僧侶の口にすべき事にあらず予今御本山に代りて茲に金子を返却すこれにて不平を晴さるべし去ながら此金子は予が虚受信施の大罪を犯して得たる者なれば今卿等に此金子と共に虚受信施の罪をも併せ譲らん。

まことに虚受依施は五逆に等しき罪なれば此金子を受けたる儘にして信心を決定せられずば恐くは未來無間の地獄へ落ち給ふべし畏るべしくよくよく聽聞して信心決定せられよと懇ろに諭されけりこゝに人々道念頓に生じて深く慚愧せりと香樹院語録にある。是を以て予が子女訓に云く、
 一吾等の用ふるもの一紙半錢と雖も佛の賜ならぬはなし之を珠畧にせざるは人の道なりされば吾衣服調度なりとも誤りて足にて踏みたらんには額にあてゝ戴きしてふ古人の美談もあるぞかし。

一佛は衆生をも捨給はず故に吾等も無用の物たりとも棄つべからず必ず之を貯ひおきて後日の用に備ふべし。註に云く、

傳燈 一道人道眼未明故身爲木菌以還信施

故曰要識披毛戴角底麼即今虚受信施者是有人未
 飢而食未寒而衣是誠何心哉都不思目前之樂便身
 後之苦也。

故に披毛戴角の禽獸を知らんと要せば即今虚しく信施を受けつゝある僧徒を見るがよい。彼等が人面獸心の怪物其物である。或者は未だ飢るざるに甘きを食し未だ寒からざるに衣服を重ねて着する是れ誠に何たる淺ましきことぞや。都て目前の快樂は未來の苦患の因と爲るを知らぬ。法昌運禪師の語に

備要識披毛戴角底麼便是備尋常亂作主宰者是備要識披舌地獄

底麼便是誑惑迷途者是。備要識寒水鏡頭底便是備濫膺信施者是。とあり、又慈受深禪師は、

未饑而食、未寒而衣、未垢而浴、未困而眠、這道眼未明、心漏未盡、如何消得。

といはれた。カアライルは

人には幸福を愛するよりも高尚なる事あり、人は幸福なくとも可なり、而して其代りに天恵を得べし

歡樂を愛せずして神を愛せよ、是れ正に永久不滅の眞理。此に一切の矛盾は皆解決せらる、此に歩み、此に勤むる者は眞の慶福を受く

といつた、熟ら思ふべきである。註に云く

智論、一道人五粒粟受、牛身、生償、筋骨、死還、皮肉。虚受信施、報應如響。

故曰寧以熱鐵纏身、不受信心人衣、寧以洋銅灌口、不受信心人食、寧以鐵罐投身、不受信心人房舍等。

これは梵網經の文を引いて深く虚受信施の罪を誡めたのである。香樹院の教訓に

一、衣食住みな佛祖の御用物なれば御門徒よりの信施に至る迄、如来聖人の御與えと存じ、現當二世の御恩を喜び、儉約を本とし、奢りにならざるやう、聊かの物たりとも、あだにすべからず。

とあり、承陽大師は

故僧正(公胤)云く衆僧各、所用の衣糧等のこと、予が與ふると思ふこと勿れ、皆是れ諸天の供する所なり、吾は取次人に充りたる計

りなり。……吾恩を思ふこと勿れ。是れ第一の美言と覺ゆるなり。

と仰せられた一切の物、皆佛天の賜なりと深く心に銘する時は、自然に虚受信施の罪にも遠かる。註に云く、

梵網經云、不以破戒之身受信心人種々供養、乃種々施物。菩薩若不發是願、則得輕垢罪。

故曰道人進食如進毒、受施如受箭、幣厚言甘、道人所畏。

これは慈受深禪師の語である。宋の太宗の謂く、朕衣を著る毎に蠶婦の勞を憶へば、即ち身冷にして温かならず、食に向ふ毎に農夫の勞を感ずれば、則ち舌甘からずと。註に云く、

進食如進毒者、畏喪其道眼也。受施如受箭者、畏失其道果也。

故曰修道之人如一塊磨刀之石、張三也、來磨、李四也、來磨、磨來磨去、別人刀快而自家石漸消、然有人更嫌他人不來、我石上磨實爲可惜。

これ亦慈受深禪師の語で、譬へば一塊の砥石を用ひて多くの人が刀を磨する如く、一個修道の人を福田として多くの信者が功德を積む、功德は喜ぶべきも道行を損し道果を失ふは哀むべし。然るに愚なる者は人の來て我道行を磨し去らざるを憂ふ、是れ憐むべきの至りである。面山和尚云く、

一日行持を欠けば一日債を負ふ……所以に百丈の曰く、一日不作一日不食……永嘉大師は饅頭下の菜を食はず、南岳慧禪

師は常に芥衲を被し、石頭希遷禪師は常に石上に坐す、末法の我輩宜しく古へを慕ふべし。

註に云く、

如此道人平生所向、只在溫飽。

故古語亦有之曰、三途苦、未是苦、袈裟下、失人身、始是苦也。

三途とは三惡道ともいふ、地獄餓鬼畜生なり。三途の苦患にも超えたるは袈裟を披すべき身として大事を究明せず、現身六道に隨して安心立命せざる境涯、これ吾人が最大の苦である。夢想國師は

飽食安眠放逸にして時を過す者、之を細流と謂はんや、古人喚て

衣架飯囊と爲す、概に是れ僧にあらす

と痛斥せられた。洞山和尚一僧に問ふ、世間甚麼物か最も苦なるや。僧云く、地獄最も苦なり。洞山曰く、然らず、衣線下に大事を明めざる始めて是れ苦なり。註に云く、

古人云、今生未明心、滴水也難消。此所以袈裟下、失人身也。佛子、佛子憤之、激之。此章始起於一於戲、終結於一古語。中間細釋許多、故曰字亦一段、文法也。

咄哉、此身九孔常流、百千癰疽、一片薄皮。又云、革囊盛糞、膿血之聚、臭穢可鄙、無貪惜之、何況百年將養、一息背恩。

これは辨才淨法師の心師銘にも見えたる文である。九孔とは眼二鼻二口一耳二大小便處二合して九つの穴で之より不淨を流す。既に身不淨なれば、貪惜すべきなし。況や百年此身を將養するも、安心を得ず、眼光落地の時は一息切斷して、却て宛となり、恩に背くの苦あるをや。是れ恰も地を養ふて地に殺さるゝが如くである。註に曰く、

上來諸業皆由此身發聲叱咄深有警也此身諸愛根本了之虛妄則諸愛自除。如其耽著則起無量過患。故於此特明之以開修道之眼也。評曰四大無主故一為假四宛。四大背恩故一為養四蛇。我不了虛妄故為他人也瞋之慢之。他人亦不了虛妄故為我也瞋之慢之。若二鬼之爭一屍也。一屍之為體也。一曰泡聚一曰夢聚一曰苦聚

一曰糞聚。非徒速朽亦甚鄙陋。上七孔常流涕唾下二孔常流屎尿。故須十二時中潔淨身器以參衆數。凡行處不淨者善神必背去。因果經云將不淨手執經卷在佛前涕唾者必當獲廁虫報。文殊經云大小便時狀如木石慎勿語言作聲。又勿畫壁書字。又勿吐痰入廁中。又云登廁不洗淨者不得坐禪牀不得登寶殿。律云初入廁時先須彈指三下以警在穢之鬼默誦神咒各七遍初誦入廁咒曰唵狼魯陀耶莎訶次誦洗淨咒曰唵賀巖密栗帝莎訶右手執瓶左手名指洗之淨水旋々傾之著實洗淨。次誦洗手咒曰唵主迦囉野莎訶次誦去穢咒曰唵室利曳婆薩娑縛賀次誦淨身咒曰唵跋折羅惱迦吒娑縛賀此五神呪有大威德。諸鬼惡神聞必拱手。若不如此法誦持則雖用七恒河水洗至金剛際亦不得自器清淨又云洗淨

須用冷水洗手須用皂角又本屑灰泥亦通若不用灰泥則屬水淋其
手背垢穢尚存。禮佛誦經必得罪云云。此登廁洗淨之法亦是道
人日用行實。故畧引經語並附于此。

有罪即懺悔發業即慚愧有丈夫氣象又改過自新罪
隨心滅。

懺悔は妄念を拂ふの帚子である。一たび懺悔すれば従前罪過の
塵埃は一時に拂ひ去る。若し懺悔せざれば泥水を盛れる器に清
水を入るゝが如く菩提の水も亦煩惱の濁汚を蒙る。故に罪あれ
ば懺悔し悪業を發せば即ち慚愧すこれ大丈夫の當に爲すべき所
である。又過を改めて自ら向上し日に其徳を新にすれば罪過は
自然に消滅する。罪とは一念心の迷ひに外ならぬされば懺悔の

正當罪過の滅すること東雲と共に暗夜の滅するが如くである。
註に云ふ

懺悔者懺其前愆悔其後過。慚愧者慚責於内愧發於外。然心本空
寂罪業無寄。

道人宜應端心以質直爲本。一瓢一衲旅泊無累。

正行經に

汝が目を端くせよ汝が耳を端くせよ汝が鼻を端くせよ汝が口
を端くせよ汝が身を端くせよ汝が意を端くせよ。

とある如く身心共に端然たるが道人の作法である此身心端正な
るは天地の公明正大なる心に合する所以即ち佛心の體現せらる
ゝ所以に外ならぬ。是を以て佛遺教經にも心を端くして質直を

以て本と爲せとある。

一瓢一衲は枯淡なる生活で、一衲の衣、一瓢の飲に安んずれば、人生の旅泊に於て身に累なく、白雲の風に任せて往來するが如くである。楞嚴經には寄於殘生旅泊三界とある。大智禪師の偈に、

幸作福田衣下身 乾坤贏得一閑人

有緣即住無緣去 一任清風送白雲

一鉢隨緣度歲華 禦寒亦有一袈裟

無心常伴白雲坐 到處青山便是家

註に云く、

佛云心如直絃 又云直心是道場 若不耽著此身則必旅泊無累

凡夫取境道人取心 心境兩忘乃是眞法。

迷倒の凡夫は目前色聲等の境に取著し、恰も魚の餌に釣らるるが如く、道人の未熟なる者は聲色等の境は皆空なりと觀て但心に取著す。之を世間の學問に徴せば境を取るは唯物論の如く、心を取るは唯心論の如くである。此二は何れも偏見で取るに足らぬ。心物不二の妙諦に悟入せざれば心境兩忘の眞法は得られぬ。良寛上人の詩に、

自出白蓮精舍會 騰々兀々送此身

一枝烏藤長相隨 七斤布衫破如烟

幽窓聽雨草菴夜 大道打毬百花春

前途有客如相問 比來天地一閑人

昨日之所是 今日亦復非 今日之所是

焉知非昨非、是非無兩端、得失預難期、愚者膠其柱、何之不參差、有智達其港、逍遙且過時、智愚兩不取、始稱有道兒、

とある此の如きを自心兩忘の人といふであらう。註に云ふ

取境者如鹿之趁空華也。取心者如猿之捉水月也。境心雖殊取病則一也。此合論凡夫二乘。天地尙空秦日月山河不見漢君臣。

聲聞晏坐林中、被魔王捉菩薩遊戯世間、外魔不見。

聲聞は佛の直弟子なるも今は小乗の行者を指す。小乗の行者は人生を厭ふが故に山林に入て道を修し専ら静寂をのみ希ふ然れども精神動くが故に心魔に襲はれて道行を失墜することがある。之に反して大乘の行者たる菩薩は塵世を以て淨土とし此中に遊

化するが故に精神が動かぬ。精神が動かぬから心魔も伺ふに路がない。大智禪師の偈に

庵内主人庵外參 靜中消息關中看

道人未必居雲外 到處無心便是山

三界悠悠不定蹤 或居林下或城中

花街柳巷東西走 古路揚塵勃々風

とある此の如き大乘の行者は外魔の窺ふ所とならぬ。註に曰く聲聞取靜爲行故心動。心動則鬼見也。菩薩性自空寂故無迹。無迹則外魔不見。此合論二乘菩薩。

三月懶遊花下路 一家湫閉雨中門

凡人臨命終時、但觀五蘊皆空、四大無我、真心無相、不

去不來。生時性亦不來。死時性亦不去。湛然圓寂。心境一如。但能如是。直下頓了。不爲三世所拘繫。便是出世自在人也。若見諸佛。無心隨去。若見地獄。無心畏怖。但自無心。同於法界。此即是要節也。然則平常是因。臨終是果。道人須著眼看。

凡●人●臨●終●の●時●に●當●つ●て●は●但●五●蘊●皆●空●四●大●無●我●真●心●無●相●不●去●不●來●を●觀●せ●よ●五●蘊●は●色●受●想●行●識●で●吾●人●の●身●心●を●い●ふ●四●大●は●堅●濕●煖●動●で●萬●物●の●元●素●を●い●ふ●四●大●五●蘊●を●合●す●れ●ば●有●情●非●情●一●切●萬●有●を●其●中●に●包●含●す●る●山●河●草●木●も●人●畜●國●土●も●元●來●因●緣●の●所●成●で●其●儘●定●相●は●な●い●か●ら●之●を●空●と●い●ふ●自●在●な●ら●ず●常●住●な●ら●ず●主

宰ならざる故に無我といふ。換言すれば吾人の身心に我といふ一物はない。即ち個人的靈魂てふものは断じてない。四大五蘊の身は因縁合すれば生じ、因縁離るれば滅する。かく信受し領解して疑はぬがよい。

真●心●無●相●不●去●不●來●と●は●吾●人●の●所●謂●宇●宙●に●遍●滿●せ●る●一●大●靈●心●即●ち●佛●を●い●ふ●佛●は●無●相●に●し●て●其●真●相●は●吾●人●が●思●慮●の●及●ぶ●所●で●な●い●さ●れ●ど●天●と●も●な●り●地●と●も●な●り●山●河●草●木●と●な●り●一●切●處●に●身●を●現●じ●て●活●潑●自●在●で●あ●る●布●袋●和●尙●の●偈●に

吾有一軀佛 世人皆不識 不塑亦不裝
不彫亦不刻 無一滴灰泥 無一點彩色
人畫々不成 賊偷々不得 體相本自然

清淨非拂拭 雖然是一軀 分身千百億

とある。これ無相の佛が千百億に分身して森羅萬象の上に其妙力を示すを吟じたのである。故に此真心即ち佛は吾人の身心の本性である。坦山和尚の偈に

精聚四大假爲人 成壞隨緣住本眞

依然孃生臭皮袋 敢保本性不壞身

不是心兮不是物 元非可名強稱佛

千生擾々無變易 萬死寂々非沒沒

とある如く、吾人の身心中に此靈性を具へてゐる。併し此靈性は宇宙に充滿せるものなれば來るも無く、去るもない、吾人が生れたる時來つたでもなく、死んだ時去るでもない。生の時性亦生せず、

死の時性亦去らずとは此意である。

佛は湛然として清淨の本性を失はず、欠ることなく、擾ることもない、圓滿寂靜で、心の爲にも性となり、境の爲にも性となり、心境の別はないから一如といふ。若し是の如く頓に丁悟すれば、過去未來現在に於て自在を得る。依て三世の爲に拘繫せられずといふた。若し臨終の時に諸佛の來迎を見、或は地獄の相の現するを見るが如きは、妄想の致す所で一も喜憂を其間に爲すべきものでない。臨濟和尚も

十方の諸佛前に現するも一念心の喜びなし、三塗地獄頓に現するも一念心の怖れなしといはれた。此意を本文に若し諸佛を見るも隨ひ去るに心なく、

若し地獄を見るも怖畏する心なしといふた。但自己の心は無念平等にして清淨公正なること法界に同じ。法界とは世界と同じで宇宙其物の如くといふ意である。これ臨終の要節であるぞと結んだ。されど如上の安心は平常の自得にあることなれば臨終の時に至つて急に此の如くなることはできぬ。註に云く

怕死老年親釋迦

如向此時明自己

百年光影轉頭非

凡人臨命終時若一毫毛凡聖情量不盡思慮未忘向驢胎馬腹裏托質泥犁鑊湯中煑燂乃至依前再爲螻蟻蚊虻

これは無業國師の語で命終の時に臨んで一毫も凡聖の情量あらばこれ大なる穴である。凡聖の情量とは吾は凡夫佛は聖人吾は迷佛は悟と吾人と佛とを區別して差別の見を立つるをいふ。吾人本來佛心の中に住し佛性を帯して生れ佛慈によりて生存し佛光の中に歸るのである。佛凡一體迷悟不二なるを強ひて自ら迷ひ自ら卑め自ら苦む。是の如き思慮を忘せざれば驢胎馬腹に入て托胎し畜生の身と爲り又は泥犁寄係又は閉城と翻す即ち地獄に墮ちて鑊湯中に煑燂せられ又は從前の如く螻蟻蚊虻の身と爲る。若し法界に同じき無念清淨の本性に安住せざれば此身即ち牛馬に異らず此心其儘螻蟻である。三途八難の苦も我迷心の前に現じ來ると、これ吾人が平素實驗せる所である。古人は臨終に際

して

いざさらは迎へ次第の月の宿
といひ良寛上人の辭世には

かたみとて何のこすらん春は花

夏ほととぎす秋はもみぢ葉

とある。かくてこそ心法界に同じき樂境に遊ぶなれ。註に云く、
白雲云、設使一毫毛凡聖情念淨盡亦未免入驢胎馬腹。二見星飛散
入諸趣。烈火茫茫寶劍當門。

評曰此二節特開寶師無心合道門權遮彼中念佛求生門。然根器
不同志願亦異。各々如是兩不相妨。願諸道者平常隨分各自勞
力。最後刹那莫生疑悔。

禪學者、本地風光、若未發明、則孤峭玄關、擬從何透、往
々斷滅空、以爲禪。無記空、以爲道。一切俱無、以爲高見。
此冥然頑空、受病幽矣。今天下之道、禪者多坐在此病。

禪學者とは初心參禪の學者をいふ。本地の風光とは吾人本來の
面目萬物の本性、亘今亘古不生不滅底のもの、所謂宇宙の一大心靈
である。若し此本分の田地を開拓して發明する所なくんば孤危
峭峻なる向上の玄關は何に從て透ることができやう。哀い哉、學
者往々斷滅空を以て禪と爲す。斷滅空とは一切の現象は空々蕩
々として無虚なりと執する小乗の見地をいふ。又或は善の配す
べきなく惡の配すべきなく、善にあらず惡にあらず、無記にして空

なるを以て道と爲すもある。古來空見を守るもの一二にして足らぬ。僧肇が白刃の下に立て、

四大元無主、五蘊本來空、將頭臨白刃、猶似斬春風

といひ、祖元が劍戟の下に坐して、

乾坤無地、卓孤筇、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影

裏斬春風

というた如きは皆空見の安心である。四大五蘊皆空であることすれば斬らるゝ身も斬る刀も空であるから、少しも憂ひ悲むとはないであらう。併しこれは絶望の安心といふべく、少しも希望と喜びのある安心ではない。枯木の安心、死灰の無心と揀ぶ所がない。又無心であればそれが禪と思ふもある、これ亦充分でない。快川

が織田信長の爲に焼き殺さるゝ時、

安禪は必ずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば火も自ら涼し

と古語を唱へたるが如きはそれで、心頭を滅却すれば水火も感せぬから、涼しいも暑いもない。

寒熱の地獄に通ふ茶びしやくも

こゝろ無ければ苦もなし

とある如く、心なくして苦みのないのは奇とするに足らぬ。心あれど苦みを感じぬなら始めて修行の功もある。鐵文和尚に參じた、お三婆は、鶏聲を聞て省あり、

野も山も花も我身も鳥の聲

なにか残りて聞くといふらん

と詠じ、臨終に子女が遺言を求めたるに

言の葉のつゆも残らぬ世の中に

いかなることを言ふておかまし

と詠じた。これ亦無心の悟りで冷かなること石の如くである。斯く空無を以て高見と爲し、冥然頑空にして遷らざるの病は、極めて療じ難い。故に其病幽というた。今天下の禪を言ふもの多く此病に坐在すとあるを見れば、古も今も此空見は夥しくあつたと見える。これ皆六祖大師の本来無一物を誤解したのである。謂ふを見すや、

無一物中無盡藏、有花有月有樓臺

註に云く、

向上一關、措足無門。雲門云、光不透脱、有兩種病、透過法身、亦有兩種病。須一一透得始得。不行芳草路、難至落花村。

宗師亦有多病。病在耳目者、以瞠眉努目、側耳點頭爲禪。病在口舌者、以顛言倒語、胡喝亂喝爲禪。病在手足者、以進前退後、指東畫西爲禪。病在心腹者、以窮立究妙超情、離見爲禪。據實而論、無非是病。

これは禪門寶訓に擧げたる宗師接化の病をいふ。耳目を以て人に接する病ある宗師は、猥りに眉を揚げ、眼を怒らし、耳を側て、點頭顧視して禪と爲し、口舌を以てする病ある宗師は、言語を顛倒し、胡亂に喝を下し、或は無義の語を弄して以て禪と爲し、手足を以てす

る病ある宗師は前に進み、後に退き、東を指し、西を畫して以て禪と爲し、心腹を以てするの病ある宗師は、玄を窮め、妙を究め、情を超え、見を離れて、徒らに超絶的なるを以て禪と爲す。若し眞實の禪に據て論ずれば、此等は病といはねばならぬ。

白隱禪師慢心高貢、信州飯山なる正受庵に至る、時たま、正受の柴を刈るに遇ふ、白隱進て謁を通ず、その席に歸るに及んで、白隱所解一篇を呈す、正受左手に偈を握りていはく、這箇はこれ汝が學得底、右手を展べて云く、那箇かこれ、是得底、白隱いはく、若し見得底の呈すべきものあらば、須く吐却すべしと云ひ了て嘔吐の聲をなす、正受拶していはく、趙州の無字、作麼生か會す、白隱云く、趙州の無何の處に向てか、手脚をつけん、正受指もて白隱の鼻

頭を抑へていはく、ても大きな手の著け様な、白隱こゝに於て通身汗流れて、慢撞倒れ了れり、正受大に笑ひて、箇鬼窟裡死禪和といふ。白隱語なし、正受いはく、汝恁麼にして足れりとするか、白隱いはく、何一足らざる處かあらん、正受南泉遷化の話を舉す、白隱耳を掩ふて出づ、正受曰く、聞梨、頭を回す、正受いはく、箇鬼窟裡死禪和、これより白隱を見る毎に總に呵していふ、箇鬼窟裡死禪和……白隱心に思へらく、老漢總に我が得悟の痛快なることを知らず、却て我を輕侮すること、是の如し、重ねて威力を全うして、死戦一場せんには、如かずとて、室に入て商畧す、正受怒罵す、白隱持論して已まず、正受すなはち捉住して、打つこと數十拳して、靠倒す、白隱榻下に墜ちて、失心茫然たり、正受之を瞰下して、呵々

大笑す、白隠猛省して通身汗を滴らす、直ちに堂上に登て禮拜す、正受高聲に叫て曰く、箇鬼窟裡死禪和、白隠因みに分衛に出て某家の門に立つ老婆いふ別處に過ぎ去れ、白隠恍然として立つ、老婆怒て竹箒を拈していはく、この漢去れといふに、猶こゝに在て脚躡するかと、便ち打つ、白隠釋然として、まさに古人の旨を領し、欣然として歸り來る、未だ門閭を踰えざるに、正受見て喜ていはく、汝徹せり。

と白隠和尚の傳にある、古人の力を用ゆる是の如く、切なるものあり、猥りにて拂子を擧し拳を堅て、眼を怒らし眉を揚げ、喝を放ち、棒を行じて、表面のみを粧ふ宗師は天下に滿つるも、渾身全体禪意の充實して、二六時中王三昧に安住する底の人は少い。吾人豈力め

ざるべけんや。註に云く、
殺父母者佛前懺悔、ナラシキ 謗般若者懺悔無路、フルニシ 空中撮影、コトヘサ 非爲妙、ススコト 物外
追躡豈俊機。

本分宗師全提此句、如木人唱拍、紅爐點雪、亦如石火
電光、學者實不可擬議也、古人知師恩、曰、不重先師、道
德、只重先師、不爲我說破。

分の宗師が此一句子を全提するは、怡も木人掌を拍て唱へ石女和して舞ふが如く、情識に涉らずして機用縦横、或は又紅爐上一點の雪の如く、捉へんと欲すれば早く既に消し去りて蹤跡なし、又は電光石火の如く、一毫の擬議猶豫を許さぬ。古人も師恩の廣大

なるを●知りていふ。先師の●道●徳●を●重●ん●せ●ず●先●師●の●我●が●爲●に●説●破●せ●ざる●を●重●ん●す●と。これは洞山和尚が先師雲岩の爲に設齋して我先師の遺徳を重んぜず亦佛法の爲にせず只だ我が爲に説破せざるを重んずといはれたのを指していふた。宗師が吾人の爲に説破せざるは、一に吾人をして自ら到らしめんが爲である。今二三の列を舉げて古人の機關を示さん。

一官人あり天桂和尚に祖意を問ふ、和尚偈を示して云く、

一華開五葉、誰道是心傳、狗子庭中走、猫兒甞上眠。

濟家の僧某天桂和尚に問ふ、和尚碧岩を講ず、昔時人の哀悼するあり、今日また悼まば什麼を將てか祇對せん。天桂欠伸していはく、會すや。僧いふ、不會。天桂いはく、碧岩死すること既に多

時。僧いふ、忽ち活する時如何。天桂いはく、方に老僧が欠伸を會せんと。僧茫然たり。

天 和尚一日草木成佛の義を以て衆を策勵す。僧あり三更樓に上り請益していはく、草木成佛、那の時劫を仔細に示せ。天桂僅かに起て勵聲して曰く、甲猫の歳、乙鳶の日。僧舊窠を脱して禮拜す。稻田性敏居士一日示語を乞ふ。天桂すなはち佛の字を書し、自ら歌を詠じて之に與ふ、いはく
ほとけとは誰かむすびけん白糸の

賤のをだまきくりかへし見よ

風外和尚の香積寺にあるや、ある年の夏、たまく、相州鎌倉圓覺寺の使僧來る。風外之を書院に延き、饗應頗る叮嚀なり。日暮

風外淋汗を行ひて後浴衣を着し、木履を穿き團扇を揮ひつゝ、庭中を徘徊す。使僧籠を隔て之を見て曰く、猫ちやくとおしやますけれど、猫が下駄はいて来るものか、と風外に向て探竿を試む。風外之を聞かざるものゝ如し。あくる朝使僧まさに辭し去らんとす。風外會下の大衆を山門の兩側に竝列せしめ、自ら使僧の背後に隨ふて山門に至る。使僧の今や山門を出んとするの刹那、風外突如として云く、それ猫がと。使僧おどろきて後を回顧す。風外乃ち呵々大笑す。風外大刹に住するを好まず、常に云く、大山肉山は野狐窟なりと。讃岐の高松藩の太夫某、藩侯の命を奉じて來り、其香華地に住せんことを囑し、その禮甚だ厚し。風外かたかく辭して肯はず。太

夫なほ切に請ふ、風外乃ち指もて眼下を壓して云く、あかんべい。太夫呆然として去る。

坦山わかき時、諸方の宗匠を看破し來りて風外に謁す。風外容貌溫柔にして、恰も婦人の如し。坦山心に之を護す、外忽ち一問を發す。坦山通身汗流れて、杜口無語。茲に於て節を折りて之に師事し、遂に其印記を受けぬ。註に云く、不道、不道、恐上紙墨。箭穿江月影、須是射鵬人。

大抵學者、先須詳辨宗途。昔馬祖一喝也、百丈耳聾、黃檗吐舌、這一喝便是拈花消息、亦是達磨初來底面目。吁、此臨濟宗之淵源。

大抵學道の人は先づ詳かに宗門の要途を辨へねばならぬ。馬祖の一喝とは碧岩集に、

黄檗百丈に到る。丈問て云く巍々堂々として什麼の處より來るや。檗云く巍々堂々として嶺中より來る。丈云く來るは何事の爲ぞ。丈云く別事の爲にあらず。百丈深く之を器とす。次の日百丈を辭す。丈云く什麼の處にか去る。檗云く江西に馬大師を禮拜し去る。丈云く馬大師已に遷化し去れり。檗云く某甲特地に去て禮拜せんとす。福緣淺薄にして、一見に及ばず。未審平日何の言句かある。願くば舉示を聞かん。丈遂に再び馬祖に參する因縁を舉す。祖我の來るを見て便ち拂子を豎起す。我問て云く此用に即するか。此用を離するか。祖遂に拂子を禪牀角に掛

て良久す。祖却て我に問ふ。汝已後兩片皮を鼓して如何が人の爲にせん。我拂子を取て豎起す。祖云く此用に即するか。此用を離するか。我拂子を將て禪牀角に掛く。祖威を振て一喝す。我當時直に三日耳聾することを得たり。黃檗覺えず悚然として舌を吐く。

と記してある。馬祖百丈の大機大用。黃檗の默識神通。餘人の口舌を以て評し得べき所でない。這の一喝は釋迦牟尼佛が昔し靈鷲山の會上にて一枝の花を拈じ。大迦葉尊者が破顔微笑して。師資單傳したる佛心印の消息で。同時に亦達磨大師が西天より東土に初めて渡來し。給ひたる直指人心見性成佛の面目である。此れ實に臨濟宗の支那に起つた淵源である。

今や我國の禪門には曹洞黃檗臨濟の三宗がある。三宗々其門風を異にするも同じく一佛心宗で佛心を悟り、佛心に住し佛心を相續し、佛心を實現し、佛心の中に在て七縱八橫自在無礙なる外に禪はない。さるを學道の人宗派的偏執に陥つて人我の見を立て、曹洞宗を奉ずる者は臨濟禪を排して看話待悟の邪禪といひ、臨濟宗を奉ずる者は曹洞禪を目して默照禪、學問禪として之を非難するを以て得たりとする。これ誠に學者の未熟によると謂はねばならぬ。參禪學道は此の如き人我の見を除くを以て至要の目的とすべきである。さるを參禪して愈々我慢を増長し、我を是とし他を非として相譏り相諍ふが如きは實に慚すべきの至りである。浮世莊子の第二章に如上の偏執を寓意的に融解せんと試みた文

字である。未讀の人の爲に茲に全文を掲げやう。
 槐かしわの木この虫むしどもより集り遊び居たる所へ、粉蝶こなてつひらくと飛來る、槐かしわの虫むしども笑ふて云く、汝は何國なんこくのものぞ、純白なる身に白粉して甚だ伊達いたてこき也、薄紙の如き翼を鼓し、おかしげなる飛びやうなり、そも何といふものぞ、粉蝶が云く、我は莊子が夢に見えし蝶てつといふものなり、汝等は槐の木に住みなれて、其外を知らず、我これを憐み思へば又汝等は我形を憐み笑ふか、汝等の骸かたの青きも、我白きも、自身みづかひの巧たくまには非ずも、こより造物者のわざなれば、其間に於て何ぞ是非すべけんや、それ物の争ひは是非より生ず、仁義を祖述し、堯舜桀紂の善惡を別にし、孔孟を規矩とし、王道をたつとび、力を以て仁義を假る、霸道を惡むは、儒者の是非なり、盈るを惡み、智惠を退け、聖を

棄て愚を復するは道家の是非なり、寂滅に趣むき親兄弟を辭して一切所有を捨て、戒律を持って、貪瞋癡の三毒を斥くるは佛氏の是非なり、儒者は佛氏をもつて異端と訕り、佛者は儒教を指して三世に味き世間法と賤しめ、自ら出世間の法と高ぶり、道家は虚無一玄の道を修して聖賢を抑へ、各己れが道を是として人の道を非とす、是によつて是非のあらそひを起し海を硯とし、萬木を筆とし、世界を紙として書き盡すとも其爭論載すべからず、銘々の道をば常とすれども物は常なるべからず、目は物を見るが役なれども訓狐といふ鳥は夜は微塵の虫をも見れども晝は大山をも見ることを能はず、目も果して常なるべけんや、耳は聲を聞くが役なれども、跋難陀龍王は耳なくして聞き、虬は掌にて聞き、牛は角にてきく、耳はたし

て常なるべけんや。口は物をいふ事が役なれども海外に骸の物いふ國あり、馬の物語は鼻を以てす、口果して常なるべけんや、足は地に附く時は歩行し、側つ時は蹶く、これ足の役なれども、蟻は倒まに行き、蠅は天井に仰いで接む、足も果して常なるべけんや、聲も鐘にも借り、又は竹にもかり、肺の臓にも扇く、風にも借る、聲果して常なるべけんや、かくのこごとく物おのゝ常なることなければ、これによつて何ぞ是非の争ひを爲すべけんや、汝らが我を笑ふもこれに同じ、汝が骸の青色なるを是と思ひ、我骸の白きを異様なる物と思ふによつて、我を非とし自ら是とす、これ髮の若々したるをもつて、鬚の虬結るをそしる也、されば已れか長じたるをもつて人の短を議するは大瓶の中の空を以て盃の中の空を笑ふ也、辨を以て辨

舌を拆くは百舌の鳴聲にて、燕子の鳴を攻る也、智慧をもつて思癡を證するは機關人形をもつて土偶の無識なるをかなしむ也、夢の裡にて我と遊ぶ人あり、我と争ふ物あり、夢さめて後、遊びし人もなく、争ひし物もなく、何物をか真とし、何物をか幻とせん、故に聖人は我を非とする者あれども、其非を容れず、我を是とするものあれども、其是を入れず、萬物はをし平均て、齊しき物なり、吾よく齊しうするにあらず、齊しうすべき事あれば、物を齊しうするに非ず、これ莊子が齊物論の意味也、こいひ終て飛去る。

臨濟曹洞の優劣を論ずる者は、眞に佛心宗の何たるを知らざる癡漢で、上記の胡蝶にだも及ばざる境涯である。抑も道は天下の公道、教へは天下の公教、宗教は天下の公宗である、釋尊と雖も得て私

することできず、孔子、老子も得て私することはできぬ。況や天下の公道、天下の公教、天下の公宗を、臨濟や曹洞に和することができぬ、筈はない。されば臨濟宗といひ、曹洞宗といふも、閑名目に過ぎぬ、承陽大師は禪宗といふさへ大いに嫌ひ給うて、佛法と稱せられである。參禪の士たるものは、斯の如き宗派的偏執を脱して、廣大なる佛心の中に、從容自適せねばならぬ。註に云く、
識法者懼和聲便打。杖子一枝無節目、恣懃分付夜行人。

昔馬祖一喝也、百丈得大機、黃檗得天用。大機者圓應爲義。大用者直截爲義。事見傳燈錄。

大凡祖師宗途有五。曰臨濟宗、曰曹洞宗、曰雲門宗、曰禪仰宗、曰法眼宗。

臨濟宗

本師釋迦佛，至三十三世六祖慧能大師下直傳。曰南嶽懷讓，曰馬祖道一，曰百丈懷海，曰黃檗希運，曰臨濟義玄，曰興化存獎，曰南院首頤，曰風穴延沼，曰首山省念，曰汾陽善照，曰慈明楚圓，曰楊岐方會，曰白雲守端，曰五祖法演，曰圓悟克勤禪師等。

曹洞宗

六祖下傍傳，曰青原行思，曰石頭希遷，曰藥山惟儼，曰雲岩曇晟，曰洞山良价，曰曹山耽章，曰雲居道膺禪師等。

雲門宗

馬祖傍傳，曰天王道悟，曰龍潭崇信，曰德山宣鑑，曰雪峰義存，曰雲門文偃，曰雪竇重顯，曰天衣義懷禪師等。

沩仰宗

百丈傍傳，曰譙山靈祐，曰仰山慧寂，曰香嚴智閑，曰南塔光涌，曰芭蕉慧清，曰霍山景通，曰無著文喜禪師等。

法眼宗

雪峰傍傳，曰玄沙師備，曰地藏桂琛，曰法眼文益，曰天台德韶，曰永明延壽，龍濟紹修，曰南台守安禪師等。

臨濟家風

赤手單刀，殺佛殺祖，辨古今於玄要，驗龍蛇於主賓。操金剛寶劍，掃除竹木精靈，奮獅子全威，震裂狐狸心膽。要識臨濟宗麼，青天霹靂平地起波濤。

曹洞家風

權開五位善接三根。橫抽寶劍斬諸見稠林。妙協弘通截萬機穿
壁。威音那畔滿目烟光空劫已前。一壺風月。要識曹洞宗麼。佛祖
未生空劫外。正偏不落有無機。

雲門家風

劍鋒有路鐵壁無門。掀翻露布葛藤。剪却常情見解。迅電不及思量。
烈焰寧空。湊泊。要識雲門宗麼。拄杖子。脚踏上天。蓋子裏。諸佛說法。
為仰家風。

師資唱和父子一家。脇下書字頭角。嶮室中。險人。譌子腰折。離四句
絕百非。一槌粉碎。有兩口無。一舌九曲。珠通。要識譌仰宗麼。斷碑橫
古路。戴牛眠。少室。
法眼家風

言中有響。句裏藏鋒。觸體當于世界。鼻孔磨觸家風。風柯月渚。顯
露真心。翠竹黃華。宣妙法。要識法眼宗麼。風送斷雲歸嶺。去月
和流水。過橋來。

別明臨濟宗旨

大凡一句中具三玄。一玄中具三要。一句無文綵。即三玄三要。有
文綵。即權實玄照用要。

三句

第一句。喪身失命。第二句。未開口。錯第三句。糞箕掃帚。

三要

一要。照即大機。二要。照即大用。三要。照用同時。

三玄

體中玄、三世一念、句中玄、徑截言句等、玄中玄、良久棒喝等。

四料棟

奪人不奪境、待下根、奪境不奪人、待中根、人境兩俱奪、待上根、人境不奪、待出格人。

四賓主

賓中賓、學人無鼻孔、有問有答、賓中主、學人有鼻孔、有主有法、主中賓、師家無鼻孔、有問在、主中主、師家有鼻孔、不妨奇特。

四照用

先照後用、有人在、先用後照、有法在、照用同時、驅耕奪食、照用不同、時有問有答。

四大式

正利少林面壁類、平常禾山打鼓類、本分山僧不會類、負假達磨不識類。

四喝

金剛王寶劍、一刀揮斷一切情解、踞地獅子、發舌吐氣、衆魔腦裂、探竿影草、探其有無、師承鼻孔、一喝不作一喝用、具上三玄四賓主等。

八棒

觸命返玄、接掃從正、靠玄復生、苦責罰棒、順宗旨賞棒、有虛實辨棒、盲枷瞎棒、掃除凡聖王棒、此等法非特臨濟宗風、上自諸佛、下至衆生、皆分上事、若離此說法、皆是妄語。

臨濟喝、德山棒、皆徹證無生、透頂透底、大機大用、自在。

無方、全身出沒、全身擔荷、退守文殊普賢大人境界。然據實而論、此二師亦不免偷心鬼子。

臨濟の喝とは臨濟出世の後、喝を放つて學者を接したのをいふた。禪林類聚に

臨濟出世の後、棒喝を以て徒に示す、凡そ僧の門に入るを見れば、便ち喝す、

とあり、また同書に、

臨濟一日僧に向て云く、有時の一喝は金剛王寶剎の如く、有時の一喝は踞地の獅子の如く、有時の一喝は探竿影草の如く、有時の一喝は一喝の用を作さず、汝作麼生か會せん。僧擬議す、師便ち喝す、

とある如く、巧みに喝を放つて學者を操縦した。

徳山の棒とは徳山は出世の後、能く棒を行じて學者を接したのをいふ。禪林類聚に、

徳山の鑑禪師、初め蜀に在て金剛經を講ず、故に周金剛と號す。後に南方の禪宗を聞て、遂に滿車に疏鈔を載て蜀を出つ。初め龍潭に見ゆ、徳山に出世して佛殿を立てず、凡そ僧の門に入るを見れば便ち棒す、

とあり、又同書に、

徳山小參に衆に示して云く、今夜答話せず、問話の者は三十棒。時に僧あり出て禮を作す。師便ち打つ。僧云く某甲話も也た未だ問はず、甚んとしてか便ち打つ。師云く汝は見れ甚處の人

ぞ。云く新羅人。師云く未だ船舷に跨らざる時好し三十棒を興ふるに

と記してある、かく徳山は棒を行するを得意とした。

皆無生を徹證す。とは臨濟も徳山も不生不滅なる宇宙の一大靈心を徹證して坦山和尚の所謂

生々不生孰妨生。不生之生曾非生。莫謂度生又成佛。

生佛由來自圓成

と悟入した。其悟入たるや頂に透り底に透つて上は三十三天より下は那落に至るまで此靈心の露現ならざるなきを看破し頂は佛祖より底は三惡道の衆生に至るまで此大靈の力に由らざるなきを領解して無欠無餘の一大圓鑑が古に亘り今に亘つて其光輝

を失はざることを體得して居たのである。坦山和尚が偈の一節に

莫錯向久遠求佛	箇々脚底自瀟洒	苑後花咲傍綠樹
山頭蟾飽眠碧空	轉瞬天外玉露墜	回首池邊春意動
啼鳥帶風香翻天	落落沒脛霜拖地	誰家巧兮彫梢末
何處匠兮刷天月	寒蟬抱樹悲何事	清颺穿絡涼無竭
嶺上閑雲任風吹	階前薜紋非人爲	天寒孤鳧凭冰爐
雪飛連襲嶽素衣	我唯一條之錫	東西南北恣經歷
有時住兮非有意	無緣去兮不停跡	垢淨之別眼中妄
三千之境夢裡相	一心不了有千差	坐斷千差無一相
千差萬相元無碍	唯人自甘立封界	

とあるは如何にも善く徹底せる悟道の境界を言明したものである。
 大機大用自在無方とは徳山臨濟の兩老が棒喝の上に於て佛祖の
 妙機を拈弄し、人をして其靈活の力を知らしむるをいふ。自在無
 方は七縦八横常方なく、臨機應變の自由を得たる有様であつて、這
 は古徳の棒喝に於けるのみならず、禪家の用處は百事皆斯の如く
 なるを要する。

佐田介石かつて須彌山説を唱へて地動説を駁す、常に人に對し
 て云く須彌山説若し鞏固ならざれば三界二十五有の建立皆破
 れん、三界二十五有の建立皆破れば、佛法悉く虛妄に屬す、苟も佛
 法を奉ずる輩は努めて須彌山説を主張せざるべからずとある

時三縁山行誠と會してまた此事を辯ず、行誠笑つて云く、吾宗は
 極樂世界に往生するを以て所期とす、然るに極樂は須彌界中の
 國土にあらず、故に須彌裂破するも、少しも吾宗の佛法に關する
 所なし、しかはあれど須彌も亦古佛の説く所なりといへば、之を
 講ずるも亦妨げずと、介石遂に須彌山説を著はし、之を携へて曹
 洞の奕堂和尚に謁す、奕堂直下に叱して云く、汝知らずや三界二
 十五有を粉碎して餘塵なからしむるは、吾佛法の本旨とする所
 なり、汝何が故に三界二十五有を固守して、須彌を珍重するや、這
 の孟八郎と。介石愕然として去る。

これ奕堂和尚の大機大用で天動説にもあれ、地動説にもあれ、奕堂
 にあつては用處自在なるは最も妙である。此の如き活機は到底

文字法師の及ぶ所でない。西郷南洲曰く、

一、剛膽なる所を學ばんと欲せば先づ英雄の爲す所の跡を觀察し、且つ事業を翫味し、必ず身を以て其事に處し安心の地を得べし。然らざれば只英雄の資のみあつて爲す所を知らざれば眞の英雄といふべからず。是故に英雄の其事に處する時如何なる膽力ありと試験し、其及ばざるもの、足らざる所を研究勵精すべし。思ひ設けざる事に當りて一點動搖せず安然として其事を斷ずる所に於て、平日養ふ所の膽力を長すべし。常に夢寐の間に於て我膽を探討すべきなり。夢は念の發動する所なれば、聖人も深く心を用ふるなり。周公の徳を慕ふ一人旦暮止まず、夢に發する程に厚からんことを冀ふなるべし。寤寐の中、我の膽動搖せざれば

必ず驚懼の夢を發すべからず。是を以て試み且つ明らむべし。

一、至誠の域は先づ慎獨より手を下すべし。閒居即ち慎獨の場所なり。小人は此處善惡の淵叢なれば、放肆柔惰の念慮起らざるを慎獨とはいふなり。是れ善惡の分るゝ所なれば心を用ふべし。古人云く主靜立人極と、是れ其至誠の地位なればなり。慎まざるべけんや、人極を立てざるべけんや。

一、知と能とは天然固有のものなれば、無知之知不慮而知、無能之能不學而能と、是れ何物なるぞや。其惟心之所爲なればなり。故に心明なれば、知亦明なる所に發すべし。

一、勇は必ず養ふ所あるものなり。孟子云はすや浩然の氣を養ふと、此氣養はずんばあるべからず。

一事の上にて機會と唱ふるもの二あり、僥倖の機會あり、又設け起す機會あり、大丈夫徒らに僥倖を頼まんや、大事に臨んでは、是非機會は引き起さずんばあるべからず、豪傑の爲したる事を見るべし、設けたる機會も、跡より見れば、僥倖のやうに見ゆ、氣をつけ味ふべし。

一、變事俄かに出來せる時、動搖せず、從容として其變に應ずるものは、事の起らざる已前、定らすんばあるべからず、變起らば只それに対応するのみなり、古人曰く、大丈夫胸中、灑々落落、如光風霽月、任其自然、何有一毫之動心哉、是れ即ち標的なり、此の如き體のもの、變に逢ふて何ぞ動搖すべきものならんや。

これ南洲が無三和尚等に參じて獲得したる心訣で、王政復古の大

活動は此養心法より出て來つたのである。これ英雄の大機大用といはねばならぬ。

全身出沒、全身擔荷とは、全身を生死の浮世に出沒し、全身に大法を擔荷して爲人度生するをいふ。支那に在ては、普化和尙、布袋和尚の如き、我國の古徳にあつては、桃水和尚の乞食の群に出沒して度生を念としたるが如き、月海和尚が賣茶翁と爲つて俗に混したるが如き、枚擧するに違はない。古人皆大法の爲に此身を輕んずるも、船子和尙の如きは、希世の勝跡を残した一人である。

船子の誠禪師は道吾、雲巖と藥山に在りしが、分別の後、秀州の華亭に往きて、一小舟を泛べたり、曾て道吾に囑して云く、師兄、向後座主あらば、一二人を指し來らしめよ、道吾後に京口の竹林寺に

至る時に夾山の會禪師住持たり。上堂に僧あり問ふ、如何なるか。是れ法身、會云ふ法身無相、如何なるか。是れ法眼、會云く法眼無礙。道吾覺えず失笑す。會座を下り禮を具して請問す。吾云く吾に同行あり。華亭の船上に在て人を接す。汝往て之に見えは必ず所得あらん。會仍て衆を散じ衣を易て徑ちに華亭に造る。師會の來るを見て便ち問ふ。大德什麼の寺にか住す。會云く似るときは則ち住せず。住するときは則ち似ず。師云く似ざるは箇の什麼にか似ざる。會云く是れ目前の法にあらず。師云く甚の處よりが學得し來る。會云く耳目の所不到にあらず。師云く一句合頭の語萬劫の繫驢橛。又問ふ絲を垂ること千尺、意の深潭に在り、釣三寸を離れて子何ぞ道はざる。會口を開かんと擬す。師橈子を拈じて劈脊に打

て水中に落す。會纒かに船に上る。師急に索めて云く道へく會口を開かんと擬す。師又打つ。會豁然として大悟し、乃ち點頭三下す。師云く竿頭の絲線は君が弄するに従す。清波を犯さず意自ら殊り。會遂に問ふ。綸を抛ち釣を擲つ。師の意如何。師云く絲を縁水の汀に懸て有無の意を定む。速かに道へ速かに道へ。會云く語は支を帶て路なく舌頭談して談せず。師云く江波を釣り盡して金鱗始めて遇ふ。會乃ち耳を掩ふ。師云く如是如是、乃ち囑して云く、吾れ藥山に在て三十年にして方に此事を明め得たり。汝今得已る。向後城隍聚落に住すると莫れ、直に須く身を藏す處。沒蹤跡なるへし。沒蹤跡の處にも身を藏す莫れ。深山饅頭邊に向て一箇半箇を接取して吾宗を嗣續して斷絶せしむる無れ。會旨を領して

禮辭して去る、頻々に首を回らす、師復喚て云く、闇梨會首を回らす、師船を擧て云く、汝道へ別に更に有る在りと、道ひ訖つて船を煙浪に踏翻す。

古人の大法を荷擔すること此の如くである、今人空しく尸位にあるもの、豈慚死せざらんや。
退いて文殊普賢大人の境界を守るとは、退いて守る所は文殊の智、普賢の行、知目行足二つながら全うして、大人の境界に住するを可とする。學道の人多くは智ある者は行なく、行ある者は智が無い。智あつて行なきは男子ありて、女子なきが如く、行あつて智なきは女子あつて男子なきが如くである。男女の和合あつて始めて一家の基礎を立つるが如く、智行兩立して始めて人格の基礎が立つ

のである。

然れども空に據て論ずれば此二師も亦偷心の鬼子たるを免れず。とは本分の上より論する時は、徳山臨濟の二師と雖も、未だ偷心ある尿牀の鬼子たるを免れぬ。开は大丈夫の漢ならば

果超佛祖總莫管 法過涅槃亦不顧

と謂へる如く、菩提も涅槃も心田の汚なればこゝに住著することはない、況や菩薩の境界をや、若し此地に住著せば伏せる鼠の偷思未だ止まざるが如くである。註に云く、

凜々吹毛不犯鋒銛煤々寒光珠媚水寥寥雲散用行天。

大丈夫見佛見祖如冤家 若著佛求被佛縛若著祖求被祖縛 有求皆苦不如無事

大●丈●夫●の●漢●な●ら●ば●佛●を●見●祖●を●見●る●も●冤●敵●の●如●く●し●て●少●し●も●佛●や●
 祖●に●執●著●せ●ぬ●。●若●し●執●著●す●れ●ば●却●て●佛●祖●の●罪●人●で●あ●る●。
 先●づ●世●間●の●事●に●例●し●て●謂●へ●ば●資●産●の●充●分●な●ら●ざ●る●人●は●資●産●に●執●
 著●し●て●忘●る●、●こ●と●が●で●き●ぬ●所●謂●有●財●の●餓●鬼●で●あ●る●。●之●に●反●し●て●
 眞●に●資●財●に●富●め●る●人●は●資●財●を●忘●れ●て●毫●も●吾●は●資●産●家●な●り●と●い●ふ●
 顔●つ●さ●も●せ●ぬ●。●ま●た●學●問●も●左●の●如●く●學●問●の●淺●き●人●は●兎●角●學●問●に●
 執●著●し●て●學●問●を●心●に●忘●る●、●こ●と●が●で●き●ぬ●。●之●に●反●し●て●眞●の●大●學●
 者●は●胸●中●に●學●問●を●忘●れ●て●全●く●無●學●者●の●如●く●で●あ●る●。●或●儒●者●が●學●
 問●上●達●し●て●以●爲●ら●く●古●聖●先●賢●の●道●は●六●經●の●中●に●は●あ●ら●ず●六●經●は●
 聖●人●の●糟●粕●な●り●と●大●見●識●を●懷●い●て●平●常●讀●む●所●の●書●を●焚●か●ん●と●し●
 たる●に●一●禪●僧●之●を●見●て●汝●が●書●を●焚●か●ん●よ●り●は●汝●が●胸●中●の●書●を●焚●

くべしといふた。

精●神●修●養●に●就●て●い●ふ●も●之●と●同●じ●く●造●化●の●無●形●に●し●て●萬●化●に●應●ず●
 る●如●く●無●一●物●な●る●心●體●を●養●ふ●が●第●一●で●あ●る●。●例●せ●ば●心●に●怒●り●な●
 け●れ●ば●自●ら●柔●和●な●る●べ●く●心●に●驕●り●な●け●れ●ば●自●ら●謙●遜●な●る●べ●く●心●
 に●貪●り●な●け●れ●ば●自●ら●清●廉●な●る●べ●く●心●に●邪●な●け●れ●ば●自●ら●正●直●な●る●
 べ●く●心●に●哀●な●け●れ●ば●自●ら●快●活●な●る●べ●く●心●に●憂●ひ●な●け●れ●ば●自●ら●安●
 心●な●る●べ●し●心●に●怨●み●な●け●れ●ば●自●ら●平●和●な●る●べ●く●心●に●害●ふ●な●け●れ●
 ば●自●ら●仁●恕●な●る●べ●く●心●に●偏●頗●な●け●れ●ば●自●ら●公●平●な●る●べ●く●心●に●私●
 欲●な●け●れ●ば●自●ら●天●道●に●合●ふ●。●換●言●せ●ば●無●一●物●の●心●に●は●一●切●の●善●
 徳●が●備●は●つ●て●あ●る●。●無●一●物●の●心●は●即●ち●無●執●著●の●心●で●あ●る●。
 若●し●之●れ●に●反●し●て●佛●に●執●著●し●て●之●を●求●め●ば●佛●の●爲●に●縛●せ●ら●れ●祖●

なかりしと也。

これを書きたりし者は野間三竹法眼也。此意は小學の敬身篇に曰く、注信民嘗言人常咬得菜根則百事可做。胡康侯聞之擊節嘆賞とあるを以、重矩の座右とせられしなり。この額今彼の家來松原作右衛門といふ者持傳ふといふ。

扱また大阪京都の勤役にも、右の額をもたせ掛置れたり。後龍の日の御屋敷にても同じく掛置れしかば、彼三竹法眼あるとき、今に至りて此三字を用らるゝ意味を尋ねたるに、内膳正答に、人たる者身を立て高名をあらはす程もとの賤きを忌み忘るゝものなり。我不省の身を以て、今既に老中列座に加はる。奢には移り易きものなれば、これを思ひ昔し本所にてかすかなる住居せしこ

とを片時も忘るまじきたため也。今高恩大祿身券には不相應なる故、殊更おそれてかくこあるなれと挨拶ありしとか。此人生れ得て實義深く諸侯太夫より進物披露するときは、加しこまり聞終て、右音物ことく、おしいたゞきで後休息せられけるよし、其到來物無益には遣はず、拂ひものなごには、決してせらるゝ事なし。一家親類におくり、餘計あれば家來に配り與へける。或人諸侯の音物ことく、く戴るゝは如何なる故ぞと尋ねしかば、重矩笑て御不審の通り、自分事は君父の賜ふ物の外影にていたゞく事は無かりしかども、今かゝる御役儀を勤めされば、誰かは内膳を尋ね給ふべきや、大小の音物品こそかはれ、みな上みより賜る拜領品と存する故に、頂戴申すこと也と申されしと也。重矩一

萬石のとき、新たに儉約の法を定めらるゝに、先づ自らを第一と
守られしとぞ、其時の歌に、

求めなき心も事もをのづから

まかせて過る身こそやすけれ

後水尾院の

かりてほす門田の秋の村雀

求めある身はさはがしきかな

とある御製とはうらがへしたる意味なり。

無求是至富、無事は貴人とは誠に名言である。註に云ふ

佛祖如冤者、結上無風起浪也。有求皆苦者、結上常體便是也、不如無

事者、結上動念即乖也。到此坐斷天下人舌頭、生死迅輪、庶幾停息也。

扶危定亂、如丹霞燒木佛、雲門喫狗子、老母不見佛、皆是摧邪顯正、底手
段、然畢竟如何、常憶江南三月裏、鶺鴒啼處百華香。

神光不昧、萬々徵猷、入此門來、莫存知解。

神光不昧とは所謂宇宙の一大靈心、神光常に昧まらず、天に在て命
となり、物に在ては理となり、人に在ては性となり、發いては萬衆の
櫻となり、凝ては百鍊の鐵となり、流れては川となり、積んでは山と
なり、昇つては月日となり、降つては海岳となる。少室夜坐吟には
此那一物を詠じて

世界本性真如性

といひ、

遍滿十方無不通、山河石壁無能障、恒沙世界在其中、

といひ丹霞和尚は

般若靈珠妙難測

法性海中親認得

隱顯常遊五蘊中

内外光明大神力

此珠非大亦非小

晝夜光明皆悉照

森羅萬像光中現

と吟じたのである。

萬古の微猷とは千古萬古不易の大道をいふた。微猷は猶美道と

謂ふが如くである。吾人は常に靈光の中に起住し、神光の中に往

來し、妙光の中に言動しつゝある。一念無事にし去つて相應すれ

ば十二時中此微猷を離れぬ臨濟の云く

汝が目前用ふる底、祖佛と別ならず、祇麼に信せずんば便ち外に

向て求む、錯る莫れ、外に向て法なく、内も亦得べからず、爾山僧が

口裏の語を取らんよりは如かず、休歇無事にし去らんには……
山僧が見處に約すれば如許の多般なし、祇是れ平常、著衣喫飯、無
事に時に過す。

然れば則ち休し去り歇し去りて一毫の妄想なくんば、吾人の左右
に神光不昧なるべく、吾人の日用是れ萬古の微猷なるべし。

是を以て本文に此門に入り來つて、智解を存する莫れといふた。

智解分別を放下して大休大歇すれば、大道は觸處に現成して受用
不盡である。されば承陽大師は

放てば手に満てり一多のきはならんや、語れば口にみつ縦横き
はまりなし

と云はれ、また、

十方法界の土地草木牆壁瓦礫みな佛事を爲すをもてその起す所の風水の利益にあづかることもがら、みな深妙不可思議の佛化に冥資せられて、親き悟を現はす、この水火を受用するたぐひ、みな本證の佛化を周旋するゆゑに、これらのたぐひと共住して、同語するもの、また悉く相互に無窮の佛徳をなはり、展轉廣作して、無盡無間斷不可思議不可稱量の佛法を遍法界の内外に流通するものなり

といはれた故に吾人の修行は先づ智解を抛て大信根を生せねばならぬ。既に大信根を生ずれば無窮の佛徳我に備はり、佛心日夜に相續して安心立命の地に至ることができ。註に云く、神光不昧者、結上昭々靈々也。萬古徹猷者、結上本不生滅也。莫存

知解者、結上不可守名生解也。門者、有凡聖出入義、如荷澤所謂知之、一字衆妙之門也。吁、起於名狀不得、結莫存知解。一篇葛藤、一句都破也。然、如終一解中、舉萬行如世典之三義也。知解二字、佛法之大害、故特舉而終之。荷澤神會禪師、不得爲曹溪嫡子者、以此也。因而頌曰、如斯舉唱明宗旨、笑殺西來碧眼僧。然畢竟如何、孤輪獨照、江山靜、自笑一聲天地驚。

禪家龜鑑終

右編乃曹溪老和尚退隱師翁所著也。噫、二百年來、師法益喪、禪教之徒、各生異見。宗教者、唯耽糟粕、徒自算沙、不知五教上有直指人心、使自悟入之門。宗禪者、自恃天真、撥無修證、不知頓悟後始即發心修習萬行之意。禪教混溢、沙金罔分。圓覺所謂、聞說本來成佛、謂本無

迷悟撥無因果則便成邪見。又聞修習無明謂真能坐安，失真常性則亦成邪見者是也。嗚呼殆哉！斯道之不傳，何若是其甚也。綿々涓々，如一髮引手鈞，庶乎落地無從矣。賴我師翁住西山一十年，鞭牛有暇，覽五十本經論語錄，間有日用中參決要切之語句，則輒錄之。時與室中二三子詢々然誨之，一如牧羊之法。過者抑之，後者鞭之，驅入於大覺之門。老婆心得徹困，若是其切也。奈二三子鈍根也，返以法門之高峻爲病。爲師翁感其迷蒙，各就語句下入註而解之。編次而釋之。鈞鎖連環，血脈相通。萬藏之要，五宗之源，極備於此。言々見辭句々朝宗。向之偏者圓之，滯者通之。可謂禪教之龜鑑，解行之良藥也。然師翁常與論這般事，雖一言半句如弄劍刀上事，恐上紙墨，豈欲以此流通方外，誇街己能也哉。門人白雲禪子魯顏寫之。門人

碧泉禪德義天校之，門人大禪師淨源，門人大禪師大常，門人青霞道人法融等，稽首再拜曰：未曾有也。遂與同志六、七人，傾鉢囊中所儲，入梓流通，以報師翁訓蒙之恩也。大機龍藏，汪洋渺若淵海，雖言探龍珠、采珊瑚者，孰從而求之。非入海如陸之手段，頗不免望涯之嘆。然則撮要之功，發蒙之意，如山之高，若海之深。設若碎萬骨粉，千命如何報得一毫哉。千里之外，有見之聞之，不驚不疑，敬之讀之，以爲寶玩，則真所謂千歲之下一子雲耳。時萬曆己卯春，曹溪宗遂四溟隱峰惟政拜手口譯，因爲謹跋。

禪家龜鑑講話畢

明治四十四年十月廿一日
明治四十四年十一月廿一日
印刷
發行

神家總監講話

定價七拾五錢

複製
不許

著作者 忽滑谷 快天
發行者 今立 裕
印刷者 非上 隆治
印刷所 東京市神田區駿河臺袋町一丁目二番地
合資 光社
東京市本郷區湯島一丁目二番地

發行所

東京市神田區
駿河臺袋町壹

光融館

電話本局二九九九番
振替東京三三三番

文學博士 芳賀矢一先生校閱
陸軍教授 友田宜剛先生編述

製全三冊和裝美本
郵稅六錢
郵稅四錢
郵稅八錢

▲第一卷 定價三十五錢
▲第二卷 定價四十五錢
▲第三卷 定價四十五錢

軍人の態度は紀律嚴格を以て最も重しとする處なり從て
言文の文章も亦明瞭ならざる可らず本書は先中等教育
生今回公命を受けて天下に轟かす新法を以て友田宜剛先生
文藝の公命を受けて天下に轟かす新法を以て友田宜剛先生
せられたるものにして更に密に絶好の正を期す者なり
女子高等師範學校教諭 西島富壽先生編
女子高等師範學校教諭 吉村千鶴先生編

●小學裁縫教程

文部省檢定済

兒童用(修正)	一卷一冊	定價九錢
兒童用(全)	一卷一冊	定價八錢
尋常科教員用(全)	一卷一冊	定價四錢
高等科教員用(全)	一卷一冊	定價五錢

近來諸種教科書の編述多きと雖獨り裁縫科に於ける著述
甚だ少し偶著なきにあらざるも皆中等以上程度に於ける
若くは専門的修むる人の爲めに便し此書は編者多年職
を裁縫の指針となるべきものなし此書は編者多年職
女子高等師範學校に依りて採集せられたり然るに拘泥し
て新小學令に依りて採集せられたり然るに拘泥し

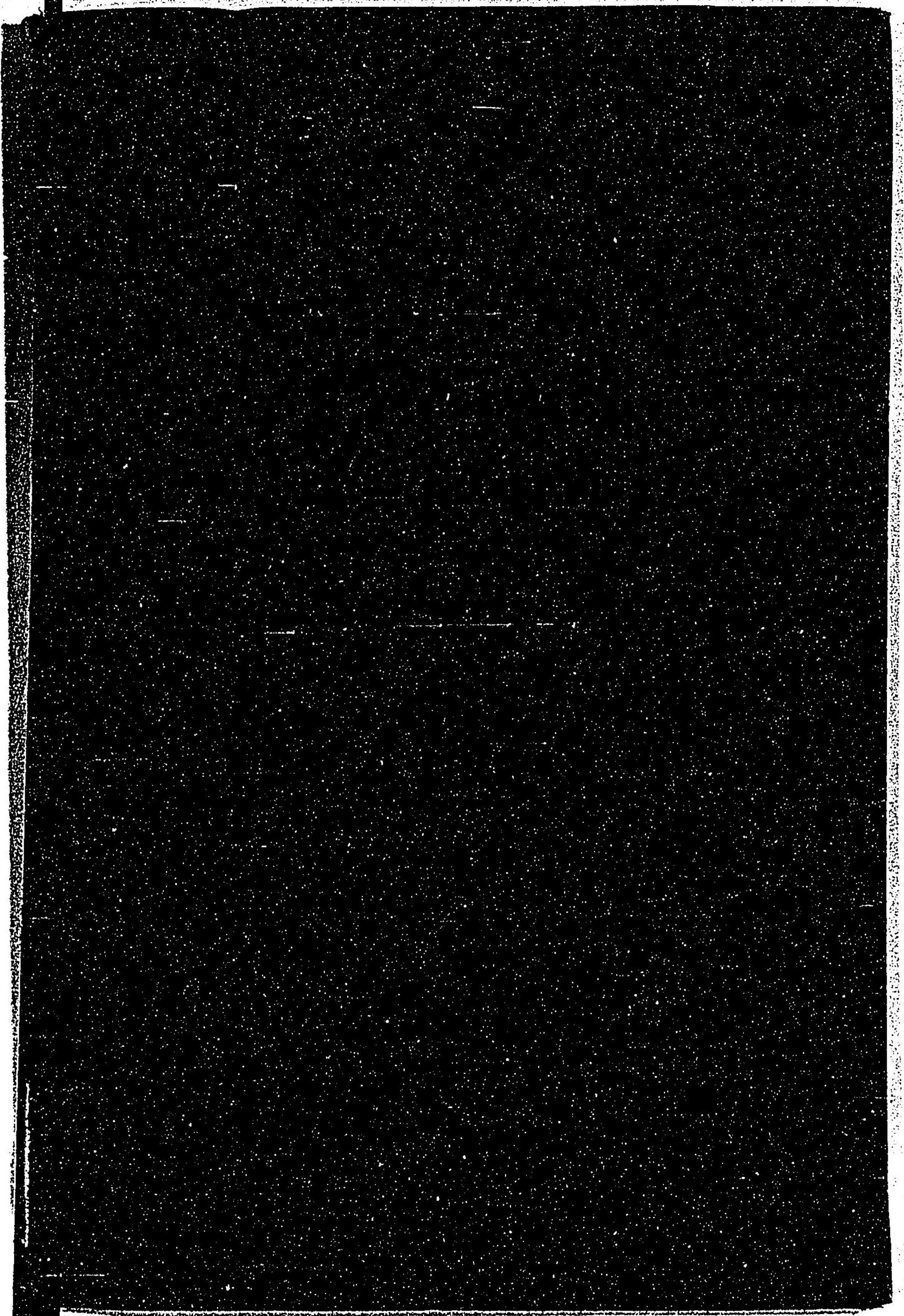
統一なき小學裁縫科の教授改良上實に適切有益なるも
の確に小學程度に此科の方針を示すものと見れば
用は兒童の注意を引くに努めしめ又教員用は此科の
に詳細なる教授の細目と附録として教授者の便に供せり
女子高等師範學校附屬小學校編纂

●教授要項及教授例(再)

郵稅四錢
郵稅六錢









019620-000-0

325-146

禪家龜鑑講話

忽滑谷快天/著

M44. 11

ABG-0400



